

大宰府の色と位階

古代の日本では色が大変象徴的であった。政庁機関に勤める役人は、専門と役職に基づいて決められた色を身に着けていた。帥（長官）は、展示された人形のように薄紫色を身にまとっていた。他の職業の人たちも役職に基づいた特定の色の衣服を身に着けていた。古代の太宰府では地位がとても重要とされていた。地位に応じて職が任じられていた。

今日でも、日本国内の神社ではこの位階制度の名残りがうかがえる。近くの太宰府天満宮や竈門神社でも、僧は地位ごとに同じ色の衣服を着ている。

ベルトも意味を持っていた。展示キャビネットの左側にある装飾ベルトは、地位の低い役人が身に着けていた地味なベルトと対照的だったに違いない。皮肉にも、これらのベルトは衣服の下に身に着けていたため見えなかった。

平らな木板は木簡である。これらは、課税品に関する情報を記録するなど、様々な用途に使用されていた。木簡は環境に配慮したものでもあった。不要になった時は、文字の書かれた板の表面の薄い層を、再度その板を使用できるように、鋭いナイフで削り落とした。これは紙の値段が高く、不足している日常品であった当時、有益な習慣であった。

展示の真ん中にある二つの毛筆の上に、すずりと松の煤を原料に作られた墨の複製がある。煤は糊と練り合わせ、ここで見られる船のような形のものに仕立て上げられた。当時の書き手は、このような文具品を使用し、万葉集にある歌をいくつか書いたのかもしれない。万葉集は、大宰府で読まれた歌を含む、日本中から集めた歌の大部の文化的重要な選集である。